

5. 施設の利用にあたって

(1) トイレ

ア 現状

「車椅子やバギーを利用している方が横になってお手洗いを利用する場合がある」ということ自体があまり知られていない。(車椅子用のお手洗いがあっても横になれるユニバーサルシートが設置されていない場合が多い。)

イ 確認したポイント

- ・施設利用者、宿泊利用客以外でも使用が可能な部屋やスペース及びユニバーサルシート設置の有無
- ・スペースが無い場合の代替案(簡易ベッドや敷きマット等)の必要性等の確認

(2) 食事

ア 現状

飲み込みや咀嚼への対応が可能か、ホームページやメニュー等からは見えにくい。

イ 確認したポイント

- ・飲み込みや咀嚼に配慮が必要な方でも食べられるメニューの有無について
(例) 食べやすそうなポタージュスープ、やわらかいプリン
- ・食べ物を咀嚼するためのミキサーの持ち込み対応の可否について
- ・ポタージュのみを希望される場合など、メニューにより量の調整が可能か倍量で頼めるか等

(3) 移動手段と行程

ア 車いすにも対応が可能な福祉バスのレンタル

福祉バスの利用にあたっては、次のことを確認した。

- ・車いすの乗車可能台数と座席位置
※バス会社へは事前に車椅子の幅を伝え、乗る順番の確認が必要であった。
- ・固定方法及び対応(車の揺れて過度な負担がかからないか)
- ・電源の有無(サクションや人工呼吸器のバッテリー切れなど緊急時に使用)
- ・リフト乗降時の揺れ
- ・待機場所
※車いすの乗降車には昇降機を使用し、非使用者の乗降より時間がかかるため、バス会社からも待機場所には細かな指示があった。バス乗降にあたって、集合場所は段差が少なくアクセスのよい札幌駅北口の交番前としたほか、車いすの方の乗降の際は、事前に確認した座席位置をもとに乗車順を伝え乗車してもらった。
- ・トイレ休憩時間(今回は移動時間が1時間以内のため、移動時のトイレ休憩を省くこととして、その旨を乗車前に声かけをおこなった)
- ・バス待機場所の確保(施設利用や昼食時にバスが駐車できるスペースの確認)

イ 車いすの方が通る道について

事前に道幅や段差などを確認(他にも見学先の候補があったため、通行の可否を判断した)

(4) 支援者等の協力・派遣

- ・ピリカコタンでは当日にイベントがあり、ガイドをつけることが難しいため、アイヌ民族文化財団のアドバイザー派遣を利用した。
- ・医療的ケアやトイレ介助が必要な障害当事者が参加する場合には、保護者または介助者同伴とした。
※参加費は介助者1名まで無料とした。この参加費設定については検討の余地がある。

(5) その他

ア 情報提供

- ・運営側から受け入れ施設側に車椅子利用者の人数や利用料（減免対象の人数）について確認のうえ、減免対象となる参加者が分かるように、色分けしたネームシールを目印とした。
- ・運営側が事前確認した内容を参加者に案内することや、施設側がHP等でバリアフリー情報の提供を行うことで、当事者の方も安心して参加・利用できるための1つの指標とした。
- ・LINEのオープンチャットを活用し、必要事項を随時情報提供するとともに、緊急時の連絡、全体へのアナウンス、自家用車で参加する参加者にバスの発着の連絡などを行った。

イ 経費

参加者から参加費を徴収し、福祉バスの利用にかかる費用の一部やイベント保険料、冊子、ネームシール代として充てた。参加費の算出にあたっては、非バス利用者の燃料代、高速利用料金などを考慮して算出をおこなった。

<非バス利用者の車両燃料代根拠>

走行距離：54.7km（札幌駅→ピリカコタン→定山溪温泉→札幌駅）

燃費：10km/L

ガソリン単価：167円/L（北海道札幌市における令和5年度7月平均値）

※参照 https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/9/2/7/1/7/9/_/04%20suii0507.pdf

燃料代：913.5円

<今年度参加費>

・バス利用者（ピリカコタン観覧料込み）

一般 1,500円（内訳：バス利用料 1,200円、実質参加費 120円、入場料 180円）

小・中学生以下 600円（内訳：バス利用料 600円、実質参加費無料、入場料無料）

※介助者1名まで無料

・非バス利用者（ピリカコタン観覧料実費のみ）

一般 300円（内訳：実質参加費 120円、入場料 180円）

小・中学生以下 無料（内訳：実質参加費無料、入場料無料）

※以上は今回の一例であり、実際の内容や参加する当事者個人に合わせた合理的配慮が重要。

6. 運営体制概要

- ・運営責任者1名（総括、全体調整）
- ・運営担当者4名（企画、実施内容の計画、参加募集、講師・協力依頼、物品準備、支出関係）
- ・医療・介護関係協力者5名（保護者1名、介助者4名）
- ・その他協力者（レク進行者、施設担当者、動画撮影・作成者）

7. その他取組の詳細（HP公開情報など）

○医療法人稲生会 みらいつくり大学校 HP

<https://futurecreating.net/works/works-8318/>

○医療法人稲生会 YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=HdqEN5joGTs&t=3s>

※右の二次元コードより視聴が可能です。



事前申込制

11月29日
水曜日
12時～

キャンパスを体験しよう！

バリアフリー施設見学/学食ランチ

札幌市手稲区にある北海道科学大学。
工学部、薬学部、保健医療学部、未来
デザイン学部があります。最先端なキ
ャンパスはバリアフリーな建物！みん
なで施設見学しましょう！



2023

北海道科学大学 キャンパスツアー

当日スケジュール（仮）

- 12:00 現地集合（北海道科学大学）
キャンパスツアー
大学職員の方に案内して頂きます
- 13:00 学食にてランチ
- 14:00 現地解散

※詳細は参加申込頂いた皆様に
メールにてご連絡致します。



こちらから
お申込みください



医療法人稲生会

オンライン*ハワイアン

制作 みらいづくり研究所 (医療法人 観生会)
2023年5月 発行

2020

2020年度からオンラインで活動を展開しています。
2023年5月現在予定している活動についてご紹介します。

2019

2019年度には、テーマをもちよって
研究活動を行いました。

2019年度の研習テーマ

- ・障害者の娯楽について
- ・いのちについてー自死と生きがいの側面からー
- ・「リアル当事者目録」の研究
- ・不安の当事者研究

2018

2018年度には、講師を招いて、
講義と議論を行いました。

2018年度の講師講義一覧

- ・障害者運動の歴史 / 西村正樹氏
- ・社会における「情報」 / 吉田徹氏
- ・障害者の社会モデルからケアの論理へ / 田中耕一郎氏
- ・どのようにして24時間介護を働き取ったか / 深瀬和文氏
- ・ここにこうしているわたし / 堀田鶴子氏
- ・映画「こんな夜更けにバナナかよ」に寄せて / 前田哲氏
- ・成人の学習とは何か / 野嶋隆志氏
- ・社会福祉制度の世界史 / 加藤智章氏
- ・当事者研究の視点から見る障害者の自立 / 熊谷晋一郎氏

みらいづくり大学では、活動のオンライン化に伴って「ラジオ参加」という参加方法が生まれました。「ラジオ参加」とは、オンラインの活動に、カメラやマイクをオフにして、聞き流すようにして参加する方法です。

それぞれの活動テーマだけではなく、各活動への参加方法についても探究をしています。ご意見があればぜひお寄せください。

詳しくは裏面へ！

読書会

本の読み方は人それぞれで、紙の本を読んだり、電子書籍を読んだり、オーディオブックを聴いたりしています。なかには、あらすじを読んだり参加する人もいます。当日は、課題作品を読んだ感想を中心に、意見の交流をしています。「ともに」読書をする、今まで知らなかった作品に出会えたり、少し難しい作品を読み切ることができたりします。課題作品は、毎回、みんなで話し合っています。(松井)

オタクの語り場

100オタクに聞いてみた」は、何かにハマっている○○オタクの方とともに、自分の好きなものに対する思いを語り合う時間です。「自分はオタクじゃないし...!」「そこまで好きな作品ではないから...!」というそのあたりに参加者はオタクである必要はありません！少しでも興味のあるテーマがあれば、ぜひどなたでもご参加ください。(吉成)

イペアロー

アイヌ食講義では講師に関屋晴恵さんをお迎えし、調理を交えながらアイヌの食や文化、知恵などを学んでいきます。調理に使用する食材は事前にHPで告知しますので、ぜひオンラインで一緒に調理してみませんか。もちろん、画面オフで聞いただけのラジオ参加も歓迎です。アイヌ食と一緒に簡単なアイヌ語も学ぶことができますよ！(久保)

THIS IS US

Amazon アプライム動画などで配信されている、アメリカの連続ドラマについての語る会です。それぞれの困難を抱える「三つ子」とその家族の話です。「過去ー現在ー未来」と場面が変わりながら、時間を超えた「つながり」が明らかになっていく、ものすごい構成です。「自分史上No.1」と言う人も多いドラマ。ぜひ「私たち」の世界にご参加ください。(土島)

お手話べり

手話を使っておしゃべりする会です。手話通士をもつ講師の方が教えてくださっていますが、他はほとんど手話の初心者。手話そのものを学ぶだけでなく、ろうあ者の方々の「表現」や「世界」の素晴らしさを学ぶ機会にもなっています。まずはラジオ参加、あるいは研究所会員ページの記録動画観覧からでもぜひ！(土島)

『コンパッション都市』を読む会

アラン・ケルハール著「コンパッション都市」の読書会を開催しています。人間に不可欠の老い、病、死、そして喪失を受けとめ、支え合うコミュニティをつくるにはどうしたら良いか。毎月1回金曜日の夜に、1章ずつ読み進めています。興味のある方は、みらいづくり研究所メンバーページのカレンダーから直接ご参加ください。みなさまとともに学ぶ機会を楽しみにしております！

2023講座一覧

映画同好会

映画同好会では、課題作品をみんなで決めて、観た感想を話し合っています。最近ではそれぞれに5点満点で星をつけています。同じ作品を観ても、星を1個だけつける人もいれば、5個の満点をつける人もいます。「この主人公がかわいい」「共感して涙が出た」「好きじゃなかった、同じ映画でも観ている人によって感想は全く違います。いつもそんな「違い」を楽しみながら、集まって話しています。(松井)

音楽講座

音楽は様々なものを私たちに与えてくれます。気分を変えたり、自分の感性や価値観を参加者と共有する楽しさを体験してみませんか。R4年度は全5回の講座で「踊る」「奏でる」「作る」「表現する」のテーマに取り組みました。今年度も楽しみにしててくださいね。(菅田) ※全4～5回開催

メタバでダベろう

最近、よく耳にする「メタバース」。直訳すると「メタバース」とは「別の世界」を指し、バーチャル空間を指します。メタバースで遊ぶことは、現実世界とは異なり、自分の分身を動かして遊ぶことができます。メタバースには、様々な楽しみがあります。メタバースで遊ぶことで、自分自身の表現の幅を広げることができます。メタバースには、様々な楽しみがあります。メタバースで遊ぶことで、自分自身の表現の幅を広げることができます。

講座の他に

定例開催の講座の他、みらいづくり研究所ではYouTubeの動画シリーズや表現の場など、様々な学びの場を提供しています。

しさくの広場

しさくの広場には「詩作」と「思索」の2つの意味が込められていて、私たちにそれはそれぞれの生活があり、それぞれに見える「景色」があり、それぞれに見える「景色」が表現してみませんか。しさくの広場では、一人一人が「表現者」となり自由なカタチでの作品を募集しています。年度末には応募作品の中から「みらいづくり大賞」の発表がありますので、ぜひ沢山の作品を募集してお待ちしています！



過去の作品はこちらから

みらいづくり新聞

みらいづくり新聞は、2021年度から発行を開始したみらいづくり大学の広報誌です。みらいづくり大学の活動をまとめて発信するだけでなく、写真・コラム・イラストなどの表現と表裏が響き合うような場づくりを目指しています。アーカイブも準備中ですので、お気軽にお問い合わせください。(松井)

動画はこちらから



バリアフリーチャンネル

「さあ、出かけよう！歴史と文化のバリアフリーチャンネル」はYouTube動画企画です。外出が難しい方や、文化施設の情報を知りたい、という方にご覧いただけたら嬉しいです。動画の中の館長さんのお話しからは、自分の興味から探すことも素晴らしいですよ。

取組3

地域における関係団体、支援者、障害者本人等が参加する共生社会コンファレンスの実施

障害者の学校卒業後の学びの充実に取り組む実践者や当事者本人が参加するコンファレンスを開催し、全道各地の学びの成果発表を行うとともに、地方公共団体や民間団体等の支援者による実践発表や情報交流を通して、本取組への理解を深めるとともに、さらなる取組の拡充に資するネットワークの構築を推進した。

1 共生社会コンファレンス in 北海道

○趣 旨

学校卒業後の障害者が生涯を通じて学び続けられる社会、共に学び、生きる共生社会の実現に向けて、障害者の生涯学習の機会を全国的に整備・充実することが急務であることから、障害者の生涯学習活動の関係者が集い、研究協議等を行い、障害理解の促進や、支援者・担い手の育成、障害者の学びの場の充実を目指す。

○日 時

令和6年（2024年）2月3日（土） 10:30～16:00

○会 場

- ・札幌市生涯学習総合センター ちえりあ
- ・遠隔会議システムを利用したオンライン参加も可能

○主 催

文部科学省、北海道教育委員会

○主 管

医療法人稲生会

○参 加 者

障害当事者及びその家族、行政担当者、社会教育主事、公民館その他社会教育施設職員、特別支援学校等教職員、大学関係者、福祉サービス事業所職員、社会福祉協議会職員、企業、NPO その他関係団体に関わる者など 154名

○内 容

10:30 10:40 12:10 13:40 15:55 16:00

開 会	第1部			第2部	第3部	閉 会
	(1) 説明①	(2) 説明②	(3) トーク セッション	(4) カフェサボッチャ	(5) パネル ディスカッション	



第1部 説明①「共に学び、生きる共生社会の実現に向けて」

説明者： 五十嵐 裕 氏

(文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室 室長補佐)

はじめに、障害者の生涯学習に関する現状と課題として、特別支援学校高等部卒業生の高等教育機関への進学率が低いことや、学校卒業後の学びの場が少なく、体制が整っていないことなどについて説明がありました。国は現在、障害者の学びの支援の大切さや成果を広く全国に発信するため、「現状分析・課題整理」、「実践研究」、「普及・啓発」の3つを柱とした事業を展開し、今年度には全国で37団体（前年度比9団体増）が委託事業として実践研究していることや、普及・啓発活動の強化のため、今年度から始まった文部科学省からのアドバイザー派遣制度、令和元年度から全国の各地域ブロックで開催している障害者の生涯学習活動の関係者が集うコンファレンス・フォーラムなど、障害者の学校卒業後の学びの支援を推進していることが紹介されました。また、関連する法令や公表している参考資料についても説明があり、それらの理解や積極的な活用を勧めていました。

第1部 説明②「本事業の概要について」

説明者： 川崎 真也

(北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課 主査)

道教委のこれまでの取組として、有識者による地域連携コンソーシアム会議の開催、障害者の学びの実態に関する研究、全道178市町村の社会教育担当者との協議を行い、今年度は地域の様々な立場の方が連携・協力して行うモデル事業の実施、地域の理解を促すためのキャラバン隊（全道5管内）、学びの支援を行う人材を養成するためのオンラインによる入門講座（全5回）などを実施していることを紹介しました。

モデル事業の終了後、担当者からは、「障害のある方が学びたいことや、学ぶ上でハードルがあることについて知ることができた」、「取組を続けるためには、地域住民の障害者の学びに対する理解が重要である」ことや、参加者に寄り添った配慮のため、福祉や医療、特別支援学校との連携が重要であるなどの声が寄せられているとの報告を行いました。

また、キャラバン隊や入門講座の参加者から、「障害者の受入れについて、どこから着手すべきか」や、「誰もが学び続けられる環境を作るために、社会教育が果たす役割を再認識できた」などの感想が寄せられており、道教委としては、次年度も障害者の学びを支援する人材の育成に向けた、研修機会の充実、教育・福祉・医療の連携によって行うモデルプログラムの実施、市町村教委や社会教育施設等の取組に対するスタートアップ支援、共生社会を実現するための地域住民への理解促進に努めていきたいという説明がなされ、今後の取組への関係者の協力を求めました。

第1部 トークセッション

【テーマ】

「北海道における障害者の生涯学習推進～過去・現在・未来～」

【講師】

宮崎 隆志 氏（NPO法人コミュニティワーク研究実践センター 理事）

土島 智幸 氏（医療法人稲生会 理事長）

尾山 清龍 氏（北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川 社会教育主幹）

はじめに、コーディネーターの宮崎氏から、トークセッションについての趣旨説明がありました。

本コンファレンスの主題「共に学び、生きる共生社会」について、現状は社会的な障害に直面し、自己決定権を奪われたり、属する世界を分断されたりしている人々があり、そのような状況が生じる原因や、それを乗り越えるための課題や方法について、必要な「仕掛け」や「仕組み」をここでは「プラットフォーム」と呼び、その機能を明らかにしていきたいとしました。

その上で、過去4回のコンファレンスや交流体験事業を実施している社会教育施設が有するプラットフォームを事例として取り上げ、これまでどのような学び合いが生まれたかや、どのような学びが生まれると、「共に学び、生きる共生社会」を創出する可能性が広がるのかを探りたいと述べられました。

土島氏からは、コンファレンス4年間の成果と課題について説明した後、「特別支援教育の生涯学習化」（学校卒業後も継続して支援していく）だけではなく、「社会教育のインクルーシブ化」（障害があろうと無かろうと誰でも参加できる）という、2つのプラットフォームもあるのではないかと述べられ、プラットフォームとしての地域やテーマごとのコミュニティ（人と人とのつながり）の大切さや、オンラインやメタバースなどによる新たな形のコミュニティの可能性についても言及されました。

続いて、尾山氏からは、障害の有無に関わらない交流事業の実際として、道立体験活動支援施設ネイパル砂川で開催された「Let's try! パラスポ」について、障害者が参加しやすくするために行った事前学習会や、その成果をもとに教育局が管内の社会教育担当者を対象に学習会を設けたことなど、教育局と連携して障害者の生涯学習の充実に向けた取組に努めていることが紹介されました。



【講師・コーディネーター】 宮崎 隆志 氏



【講師】 尾山 清龍 氏（左）と、土島 智幸 氏

その後の三者の対談では、例えばパラスポーツのように、健常者と障害者がフラットな関係を作ることが大切で、障害者にも配慮したルールを創意工夫するなどの配慮が必要であることや、そのような気付きや経験を重ね、参加者に合わせて、日常生活で当たり前となっていることやルールを変えていくことが、民主主義や共生社会の実現につながるのではないかという見解に至りました。

第2部 カフェサボッチャ

カフェサボッチャは、バリアフリー図書の展示やミニアイ又語講座の実施など、各種展示や体験のできるブースを設けて、障害者の学びをより身近にするために設けました。

1. ドローンサッカー

ボールに見立てたドローンを操縦して、空中にある円状のゴールを目指す競技「ドローンサッカー」は、手指に障害のある方でも楽しめるスポーツとして、今後の可能性を探るために紹介されていました。

会場には、操縦機とボールとなるドローンが展示され、訪れた参加者は興味深そうに、担当者からの説明を聞き、最新の技術を用いた学びの可能性を感じていたようです。



2. バリアフリー図書

“見て、さわって、楽しめる” 布絵本や、内容が理解しやすいLLブック、大きな文字が用いられた絵本など、障害の有無にかかわらず楽しむことのできる図書を展示しました。

実際に点字絵本を手にした方やデジタルの書籍を試してみる方がいるなど、普段目にすることが少ないバリアフリー図書に関心を寄せていました。



3. 写真展 “みんなとくべつなひとり”

北星学園女子中学高等学校では、有志の生徒が集まり、医療的ケア児の写真展を企画、開催しています。2021年に取組を開始し、医療的ケア児・者を取り巻く環境を調査したり、訪問診療への同行や短期入所の見学を通して、「何を思い、何を感じたのか」などが、展示されていました。

参加者は、同校の取組から、今後に向けた取組の充実への思いを強くされていました。



4. EyeMoT

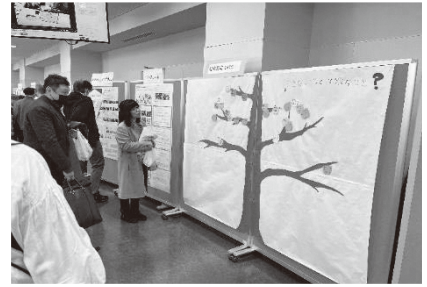
島根大学総合理工学部の伊藤史人研究室が開発した「EyeMoT (Eye Movement Training)」は、手足が不自由な方であっても視線入力で絵を描くことができるソフトウェアです。本ブースでは、抱っこスピーカーで音と振動を感じながら、視線入力を体験できるゲームなども紹介されていました。



5. 社会教育カフェ

「インクルーシブな学びの場って何だろう。」というテーマで、参加者が考える学びについて気軽に語り合い、その内容を付箋に書いて貼り、“学びの木”を实らせていきました。

また、「できないことってダメなこと？」の問いに対して、苦手なことを付箋に記載して貼り付ける方もいましたが、その苦手なことをポジティブに変換してくれるメッセージがすぐに貼られるなど、今後の学びの機会を拡充させるヒントも沢山出されました。

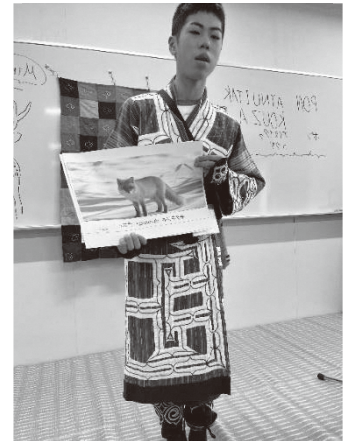


6. ミニアイヌ語講座

アイヌ文化が大好きで、医療法人稲生会が行う「みらいづくり大学校」のアイヌ語講座にも参加している中学生の小川神威さんが、ミニアイヌ語講座の講師を担当しました。

小川さんの説明で、アイヌ語での自己紹介や動物の名前を練習した後、動物ビンゴも行いました。景品の用意もあり、会場は大いに賑わっていました。

難しい発音も丁寧なレクチャーで、アイヌ語に初めて触れる方にも、大変分かりやすい講座でした。



第3部 パネルディスカッション

【テーマ】

「北海道内各地の実践～過去・現在・未来～」

【パネリスト】

五十嵐 真 幸 氏（NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所 代表理事）

田 島 美 穂 氏（いっしょにね！文化祭実行委員会 事務局）

鹿 野 牧 子 氏（Uスタイル北海道プロジェクト DE I & Sアドバイザー）

松 井 翔 惟 氏（みらいづくり研究所 学びのディレクター）

【コーディネーター】

土 畠 智 幸 氏（医療法人稲生会 理事長）

パネルディスカッションは、北海道の障害者の生涯学習の現状や課題について、土畠氏がコーディネートを務め、道内各地で先進的な取組を共有するために行いました。パネリストからは、それぞれの実践の“過去”“現在”“未来”について、具体例を用いて説明されました。

参加者からは、「取組を行う上で解決すべき課題があっても、常に前向きに取り組む姿から、勇気をもたらえた」、「障害当事者の学習ニーズを踏まえることで、より良い取組になることが分かった」などの感想が寄せられました。

1 実践紹介①（パネリスト：五十嵐 真 幸 氏）

「自分たちのような障害者のことを知ってもらいたい」という気持ちから、同じ思いを持った仲間とともに活動をスタートさせ、現在では学びや交流の場づくりに加えて、就労施設としての仕事づくりも行っているそうです。

講演・体験イベントなどを企画し、実践することで団体の知名度を上げることや、団体の有する強みを生かして、当事者目線で寄り添った内容で行うことや、障害がある人が安心して仕事や生活ができるように、就労支援など幅広く取組を実施していることが紹介されました。

2 事例発表②（パネリスト：田 島 美 穂 氏）

田島氏が所属する三角山放送局では、社会的少数者の声を切り捨てず、「誰もが想いを発信できること」を大切に、ラジオ放送を続けてきました。その取組をきっかけに「いっしょにね！文化祭」をスタートさせ、10年目を迎えます。

文化祭は、多様な人たちが同じステージでパフォーマンスを繰り広げる発表会であり、「相互理解」をテーマに行っています。誰もが楽しめるよう、それぞれの違いを理解し尊重し合うこと、分かり合うまで話し合いを行うことを重視しているそうです。今後は、道内各地で開催することを目指し、取組の輪をひろげたいとの思いが紹介されました。

3 事例発表③（パネリスト：鹿 野 牧 子 氏）

障害がある方もない方も、共に学び、遊ぶことで相互理解につながっていくことや、様々な出会いが新たな学びと広い視野をもたらすことができると考え、様々な研修やイベントを行っています。

障害者自身が講師となり、障害理解や差別解消についての研修を企画・運営することや、誰もが楽しく当事者意識を持って活動に参画するきっかけを作るために、「防災マルシェ」や「ファッションショー」を開催し、障害の有無にかかわらず学び、支え合う社会の実現に向けて活動を続けていることが説明されました。

4 事例発表④（パネリスト：松 井 翔 惟 氏）

みらいつくり大学は、「障害者が通える大学をつくりたい」という思いから、障害の有無にかかわらず学べる場として、取組をスタートしました。取組を実施するに当たっては、障害の有無に関わらず、それぞれの違いを認め、互いを知るまで話し合いを重ね、新たなアイデアを創造することを重視しています。

当初は対面での講義や研究が中心に行っていましたが、障害者の中には、会場参加が困難な方も多いため、講座の実施方法を問い直し、誰もがどこでも参加しやすいように、積極的に遠隔会議システムを用いるなどの工夫をしていることも紹介されました。

